

米原歴史街道

米原市の歴史・文化財を歩く 125

湖の城・朝妻城

—米原市の城館跡③—

港を守る城跡

戦国時代の城郭は、領地や領民を守るために、集落や街道、領地の境を見下ろす山の上に築かれましたが、今回紹介する朝妻城は、琵琶湖の重要な港を守り、湖に面して築かれたお城です。

天野川河口南岸の先端部には、天野川舟溜(朝妻漁港)があります。この一帯の湖岸には奈良時代から中世にかけての遺物が散布する朝妻湊遺跡があり、その沖合いには、一二世紀中葉を中心とする遺物が多数発見された湖底遺跡・尚江千軒遺跡があります。いずれも、古代の要港・朝妻湊に関連する遺跡です。朝妻湊は、琵琶湖東岸の東山道(中山道)と北陸道の接点に位置し、『万葉集』に「近江の海、八十の湊」と詠まれた琵琶湖の港のなかでも、『延喜式』(九二七年成立)に塩津湊(長浜市)、海津湊・勝野湊(高島市)とともに朝廷の公認港として記載されています。

東日本からの物資は、ここから大津あるいは坂本の港を経て都へ運ばれました。また、隣接して、朝廷などに食物を納める役所筑摩御厨が置かれていて、その重要さがわかります。天正年間(一五七三〜九二)に「長浜湊」が、慶長八年(一六〇三)に、彦根藩によって「米原湊」が開かれるまで、長期間にわたり重要な役割を担いました。朝妻城は、湖周道路をはさんだ東側、朝妻集落にある中島神社一帯に築かれたものと考えられています。

いまでも残るお城の痕跡

『嶋記録』に「佐々木殿の侍 須田の何かし、新庄藏人方所縁により、新庄か朝妻の城へ見まひけるに」とあり、朝妻城が新庄氏の居城であったことがわかります。

新庄氏は坂田郡新庄(米原市新庄)の国人で、『寛政重修諸家譜』によると直昌のときに朝妻に城を構えた

と記されています。その子直頼は浅井氏に属していましたが、後に織田信長に降り、秀吉の馬廻りとなり、天正十一年(一五八三)、摂津国山崎城(京都府大山崎町)へ移封となり、朝妻城は廃城となりました。子孫は常陸麻生藩主として明治まで大名家として存続しました。現在、城跡に建つ中島神社の鳥居にかかる額は子爵新庄直陳の揮毫によるものです。また、新庄氏の墓所が総寧寺(米原市寺倉)にあります。

新庄氏歴代の居城は箕浦荘の新庄城であったにも関わらず、朝妻に城を築いたのは、ここが古代以来の要港であり、浅井氏がここを支配するために新庄氏に命じて朝妻城を築かせ、守護のために新庄氏を入れたと考えられます。

現在、城跡の痕跡は認められませんが、中島神社があるのは「向蔵」で、地元では「殿屋敷」とよばれています。近年まで南北二〇〇メートル、東西二〇〇メートルの水濠が巡って、いまでも用水路として東と南面に残っています。明治五年から一一年頃に作成されたと思われる「朝妻筑摩村地券取調縮図」には、小字「向蔵」を巡る水濠が認められますが、とくに南面には幅の広い水濠が描かれています。これは、城に付属する船溜りの痕跡ではないかと

考えられています。また、推定外堀の北側には小字「馬場」地名が残されています。

「朝妻筑摩村地券取調縮図」には、城の北側に条里(古代の土地区画)に沿わない蛇行する水田が隣接して描かれています。これは、天野川の古い河道とみられ、朝妻城は、朝妻湊を押さえるだけでなく、天野川の河口を押さえることによって、東山道により運ばれる東日本からの物資を掌握することも重要な任務として築かれたと考えられます。

(歴史文化財保護課)



▲朝妻城空撮(中央が中島神社)